科目区分：初等教育コース（教職科目）・教育課程及び指導法に関する科目
授業科目名：初等音楽科教育法

初等音楽科教育法

音楽教育講座：楠　俊明

１．授業の目的

音楽教育の歩み、目的、内容、学習材、学びの在り方等について、基礎的な知識を得ることによって、学校教育における音楽科教育の位置づけや意義について理解する。さらに、小学校の音楽の授業を展開するための基礎的な知識・技法を身につける。

２．授業の到達目標

○　音楽教育の意義・目的・内容・学習材・学びの在り方等の基礎的知識を説明できる。
○　音楽科の授業づくりにおける学習材研究を行うことができる。
○　実際に音楽の授業づくりができる。

３．授業の位置づけ

初等音楽科教育法は３回生小サブコースと副免を取るための学生約１６０名の受講生である。多くの学生がこの授業後、附属小学校の教育実習に参加するため、そこで実施される活動ができるように学生に呼びかけて授業を開始した。音楽の実習で行われるのは、主に次の３つの活動である。①～③のことができるようになることを念頭に置きながら、授業を進めてきた。

①　子どもの前での独唱
②　自分のクラスでの５分間授業
③　音楽の授業参観と音楽の実習授業

４．本年度の研究

本年度はコロナ禍でこの①～③が難しくなっていた。そこで、遠隔授業における学生への歌唱指導の在り方を中心に、教育実習に対応できる音楽教師としての技能的な指導の在り方の研究を行った。さらに、これまでの校歌独唱と５分間授業に代替できる活動として一人一人の歌声の録音披露を行うことにした。また、この活動や授業の成果としての教育実習での活動状況を小学校の先生に協力をいただきながら、次の４点で研究を進めた。

○「初等音楽科教育法」の遠隔授業で技能を理論的に習得させる取組を工夫し、その習得度をアンケートで考察する。
○「初等音楽科教育法」の遠隔授業で実習中に披露する歌の録音を完成させる。
○実習中の学生と子どもたちとの出会いをコーディネートし、歌唱録音の鑑賞から子どもの反応を評価する。
○アンケート結果や子どもの反応から、今後の歌唱指導の在り方を考える。

５．授業での歌唱指導

まずは、遠隔でスケジュール通り、指導者として音楽の授業での必要な技能を考えさせたり、練習させたりしながら、学習指導要領をもとに、教科書を使って実際の音楽の授業を構想して進めてきた。そして、それらを生かして自分ならばどのように授業を展開するかを試行させて学ばせていた。

しかし、コロナ禍で思うような展開はできないため、非対面の講義でどのように進めていけば、理論学習の中で技能を学ばせることができるかを考えた。まずは、楽しく歌えること、正しく歌えることを大切にしながら、歌唱指導の在り方について考えさせた。特に 24 曲の共通教材を中心に、その曲を通して何を感得させるかを学年の発達特性と関連させながら、歌い進めていく授業を行った。（表１）

第２学年曲目	活動材料
かくれんぼ	日本　呼びかけと答え　強弱
虫のこえ	音色　メロディー　創造性(楽器)
夕やけこやけ	メロディー　歌唱法　歌詞
はるがきた	メロディー　音色　反復

表１．第２学年の共通教材活動材料案

共通事項等の要素の学習に止まることなく、一番大切なことは、楽曲そのものの特

徴や面白さ、その曲を歌うための発声法やリズム感、さらには表現方法であると話しながら歌っていった。

また、共通教材以外の曲目についても実際に歌わせたり、実際に活動を実施させたりしながらその曲の特徴を捉えさせて、指導方法について考えさせた。（表２）

第２学年曲目	活動材料
朝のリズム	メロディー 拍子 反復 変化
山びこごっこ	呼びかけと答え　音色　強弱
かえるのがっしょう	メロディー　フレーズ　輪唱
たぬきのたいこ	リズム　拍　メロディー
いるかはざんぶらこ	リズム 拍 音の重なり 音色
こいぬのビンゴ	拍　リズム　反復　速度
こぎつね	音色 メロディー 強弱 楽器

表２．第２学年教科書教材活動材料案

ところが、ネットの向こう側でどのように歌っているかは評価できない。一緒に歌わせると、タイムラグやハウリングが起こる。歌っているかどうかさえわからない状況なのである。このままでは、音を通した感覚の理解や歌うことの楽しさの感得さえできない。そこで考えたことが、一人一人の歌声を録音させてそれを評価していく方法である。もちろん、歌う表情はわからないが、声の表情は聴き取ることができるし、一人一人を評価することもできると考えたのである。問題は 160 人もの録音を毎回どのように聴いていくかである。

歌唱教材をずっと続けていくわけではないので、何回かに分けて提出させ、それを評価していくことも考えたが、これも多くの時間を費やし、評価が間に合わない気がした。そこで、附属小学校教員と相談して、校歌独唱と５分間授業の代わりに、今年は学生の録音を実習での一人一人の課題としたのである。

本当ならば、学生は夏休みの附属校の実習事前指導で校歌を練習して初めての授業で子どもの前で披露するわけである。しかし、今年はそれができないので、教育法の授業内で校歌を練習させ、発声法を考えさせて録音を課題とした。附属小学校の校歌の楽譜を配布し、それを見ながら練習を始めた。リモートであるため、楽譜を見ながら視唱させ、後は自分で歌えるように学習課題とした。あまり時間を取らなかったが、一つの課題が見えたことで学生から多くの質問が出てきた。「この音程が難しい」「ここはどのように歌えばよいか？」「高い音が出ない」「録音ができない」等、一人一人が自分の課題と向き合ったのである。録音するまでに、一人一人の歌声を聴いて指導・支援をしたかったのであるが、160 人にそれはできない。そこで、子どもの前で歌うための発声についての資料を配付（図１）して、自分で歌い方を考えさせた。

図１．遠隔授業での歌唱指導のポイント

項目は「姿勢と呼吸」「顔の表情」「響き」「フレージング」の４つに分けて、自分の歌い方や子どもへの歌唱指導の方法等を考えさせた。簡単に４点についての話を行い、今までの歌唱経験やこの授業での講義内容から、学生が理論だけでどの項目を理解し、実践できるかを確かめるために、あまり説明はしなかった。

この録音を前期の最終課題とし、その課題を実習の歌声披露の代替教材として使用することを提案し、質問や修正を可として学生の学びに任せた。録音の途中で音がわからなくなった学生や歌い方の指導をして欲しいという学生には、個別でネット指導を行った。学生から次々と録音データが送られてきたが、その録音を聴いて、そのままでは子どもへの披露としては難しい学生には個別に連絡して、修正を行わせた。何度も挑戦した学生や環境のために長く歌

うことはできない学生もいて、全てが揃うには時間がかかった。

幸いなことにこの校歌練習の途中で、少人数での対面授業が認められた。20 名ならば行っても良いと許可がおりたのである。160 名を学生の授業履修の都合で２班に分け、80 名の授業でもう一時間授業のコマを増やして、20 名を４回で対面授業を行う計画ができたのである。対面授業では実際に 20 名で互いに５分間授業を体験させ、60 名がそれをネットで視聴する方式をとった。個人で挑戦したり、グループで協力したりとそれぞれの都合に合わせて、弾き歌いの模擬授業を全員が体験することができた。この歌唱指導経験が課題の取組に好影響を与えたことは間違いない。

課題提出の歌唱録音とともに、自分自身の録音活動に対する思いや自己評価を次の項目でアンケートを実施した。（図２）

図２．録音終了後アンケート

自己評価であるため、それぞれの項目がきちんとできているわけではないが、理論で理解させる歌唱技能指導の方法を見いだす一つのデータとして考察することができると考えた。アンケートの結果は次のようになった。（表３）

表３．録音アンケート結果(N＝155)

この結果から大きくわかることは「姿勢と呼吸」「顔の表情」は自分なりに理解できるが、「響き」や「フレージング」は簡単ではないと言うことである。

さらに、学生の自由記述の中から自分が頑張ってできたこと、難しかったことに書かれている文章から、特筆すべきものを書き出した。

・まず、音程を合わせるということを頑張った。自分の癖として一定の音程の高さで歌ってしまうことが多かったりするものもあり、友人にネットで指摘してもらいながら音の高さに気をつけた。歌う際には楽譜に並んでいる音符の配置から、音の高低をイメージしながら歌うようにした。また、難しかった点として、声が震えたり、すくい上げるように音が出たりするところが多く、自分では理解していてもイメージした声の出し方ができないといったことがよくあった。特に歌い出しの「あさかぜ」の「あ」と「おおしく」の「お」が特に出なかった。そういうところはその音だけを綺麗に出せるように練習したつもりである。

・普段から高音が苦手なのだが、姿勢や呼吸を意識すると少し高い音も出せることができた。正しい姿勢・呼吸は音楽の授業で学習してきたが、なかなか実行できずにいたため、今回の課題を機に見直してみると、高い音を出すことができたのである。響きについては、意識してもできた感じはせず、難しく感じた。また、フレージングについて、８拍を一息で歌うことは少し難しく、息が続いても満足な響きができなかった。

このように学生は自分の経験から、この課題に一生懸命取り組んだことがわかる。小さい頃からの歌唱経験をもとに、より良い自分の録音を仕上げようと努力している学生が多かったようだ。また、理解していてもそれを実践することは難しいこともわかる。課題の４項目にはなかったが、楽譜を読んだり、音程を正しく取ったりすることも大変であったことがわかった。

また、学生の自由記述の中から記載されている言葉で多いものを集めると次のようになった。（表４）

頑張ってできたこと
姿勢　呼吸　音程　楽譜　響き　表情　顔 口形　歌詞　高音
難しかったこと
響き 音域 フレーズ 抑揚 音程 呼吸 表情

表４．自由記述の記載内容での多い言葉

これらの学生の自由記述の内容も含めながら、それぞれの項目について分析してみる。

「姿勢と呼吸」では多くの学生がこれまでの教育や自分の経験から、自分の理解で歌うことができていたようである。しかし、中には「呼吸が浅くなる」や「横隔膜がわからない」等、歌う時の呼吸法についてもっと理解したいと記述している学生が１割程度いた。実際、呼吸法は歌うことの基本であり、身体全体のバランスや支え等は簡単な技能ではない。多くの学生はこれまでの経験から自分なりの方法を身につけていたり、他の項目よりも分かりやすいと考えたりしたのだと推測する。実際にしっかりとできていなくても、意味はわかる学生が多いのだと考えた。

「顔の表情」についても、曲の雰囲気に合わせてしっかりとつくりたいと書いている学生が多かった。この項目もこれまでの教育経験から理論的な理解できているのだと考える。しかし、中には「その表情が続かない」や「口形が難しい」などと自分の悩みを明確にしている学生もいた。

「響き」については、データの通り、学生にとって難しい内容であることがわかる。「書いていることはまあわかるがその実践が難しい」や「高音域の響きが難しい」「声を当てることが難しい」等、自分の歌い方の問題点をしっかりと理解している学生が多かった。この点については、非対面の指導は非常に難しく、一人一人の歌声を見つめていくことが大切であると考える。学習指導要領の「自然で無理のない響き」を理解させるためには、様々な歌声を聴かせてその違いを聴き取らせることが大切なのかもしれない。

「フレージング」についても、データでの理解度は低い。学生の記述の中には、「フレーズを考えて抑揚を付けることが難しい」「下降型のフレージングが難しい」「鼻濁音がわからない」等、歌い方を工夫しようとしているが簡単にはできないことがわかった。実は、この項目は他と関連していて、呼吸法や身体の使い方、響きなどがわかっていないと実際には難しい内容なのである。非対面での指導を考えると、まずはフレージングの良い歌い方を聴くことが大切なのかもしれない。

以上、４項目の理解度アンケートから、指導するために必要なことを考えてきたが、最終的には４項目が関連していることを忘れてはならない。そのことを理解させながら、歌唱方法について考えさせることが大切である。また、音程を正しく歌うことに苦労した学生も多く、楽譜を見て自分で歌えるように練習することは大変だったようである。読譜力も考える必要がある。

６．附属実習での音楽活動

フェイスシールドとマスク着用での実習開始。同じ空間で呼吸を合わせて歌う喜びを味わうことや、共に空気を揺るがす響きを共有することが難しい中での授業となった。そんな中でも子どもたちは、実習生との音楽活動に期待を膨らませていた。新しいかたちの出会いとなったが、子どもの反応を間近で感じることができたのは、実習生にとっても今後の課題や自分自身を見詰めるきっかけとなったのではないだろうか。歌唱録音の鑑賞を通じて、遠隔授業での歌唱指導の在り方も見えてきた。今までは対面での歌声披露であったが、音だけの鑑賞は、思っていた以上に子どもの想像力を掻き立てた。

歌唱録音の鑑賞を始めると、子どもたちは聴き耳を立てて、歌い始めに微かに聞こえる息を吸う音にさえ反応していた。歌う表情が見えないのにもかかわらず、声の表情をきちんと聴き取っている子どもが多いことに驚いた。そこでの、子どもの声を４つの項目ごとに集めてみた。

【姿勢と呼吸】

・鼻からたくさんの息を吸う音がきこえたよ！

・大きい声の先生は、いい姿勢なんだと思う。

・高い音のところ（や～まなみを～）で、あごが上がってるのかも。（音が･･･笑）

・体に力が入っているんじゃないだろうか。

【顔の表情】

・声が明るいから、きっと口が大きく開いているんじゃないかな。

・この先生の声好きだな！にこにこ歌ってるような気がする。

・笑っていそう(口角が上がっていそう)。

・大きく口を開けている気がする。

【響き】

・この声は○○先生だ。

・言葉がはっきりしているね。
・緊張してる声がする。楽譜をみてるのかな～？
・曲の山（き～ぼうの窓が～）が気持ちいいくらい響いているね。
・男の先生の声、お父さんみたい。低い声だ。
・この先生、お風呂で歌っているのかな。
・伸ばす音が、ビブラートしててきれいだね。
・喉から声が出ている気がする。
・胸から声が出ている。
・言葉が聞き取りやすかった。
・かっこつけすぎた歌い方だった。
・もっと力強く歌ったらいいのでは。
・明るく聞こえた。
【フレージング】
・最後の音がしっかり伸びていて素敵だな！
・はぎれがよかった。
・なめらかでゆったりとしている。
・言葉が切れすぎていた。
・だんだん声が大きくなっていた。
・強弱がついている。
・「仰いで」のところがはずんでいた。
・弾みすぎていた気もするけど、表情はよかった。
【その他】
・休符があった。
・音がとれていた。

録音状況の違いで音質や音量等に差があり、なかなか比較したり聴き味わったりするに至らないものもあった。やっぱり生で先生たちの歌を聴きたいなという素直な意見もたくさんあがった。また、実習生も子どもの反応を受け、伝えきれない思いがあったのか、歌わせてほしいと申し出てくれたクラスもあった。

音程やリズムなどの要素はよく聴き取れたが、子どもたちが多くの反応を示している声の響きは、媒体を通じて伝える難しさを感じた。これが音だけでなく、動画など視覚的な情報が増えることで伝わる要素も異なるのだろうか。今回の検証で、音楽が人と人とを強くつなげることを改めて実感するとともに、言葉で伝える以上の内容を表現することのできる音楽の力や音のコミュニケーションのよさなど、新たな可能性に気付くことができた。

７．授業データと附属実習からの考察

この研究から次のように考えてみた。

○　これまでの経験から、形として見えやすい姿勢や呼吸や表情等は自分なりに考えて取り組むことができる。

○　響きやフレージング等、音楽的な感覚が必要なことは、理論だけでは理解したり実践したりすることが難しい。

「初等音楽科教育法」の理論的な活動のみで、学生の音楽的技能の向上を目指すことは簡単ではないことがわかった。特に、響きやフレージングの指導方法を学ばせるには、小さい頃からの音楽的経験が違うため、理論だけでは個々の学びに大きく差が出る。実際に音を聴き、その良さを理解しながら感得できないと中途半端な活動となるわけである。こうした学生の不満足な活動を少なくするためにも、様々な歌唱記録を聴き取らせる資料や時間を増やすことで音楽的な差異を考えさせ、自分なりの技能方法を習得させることが重要であると考えた。また、時間は要するが、個の歌声を事例に練習や指導する場面を鑑賞させることも大切なのかもしれない。しかし、これには 160 人という大人数の課題が残されている。それでも、学生は実習での歌唱披露に向けてしっかりと自分のより良い録音活動に取り組んだことは間違いない。

８．終わりに

対面授業ができない中での歌唱活動の在り方について考えてきたが、大切なことは本物の音楽にいかに触れていくかが当たり前であるが、重要であると再認識できた。特に、歌唱はそこでの空気の響きを感じ取ったり、自分の身体を通して発信し合ったりしてこその活動である。大学生も子どもたちも、それができないことへの不満足を改めて感じ取ることができた。いかに、対面的な活動に近づけることができるかが最大のポイントである。

対面授業ができるようになっても、この本物の音楽に触れていくことと、細分化した学習を統合していくことを念頭に置いて指導方法を模索していきたい。

最後に、今年の教育実習での音楽の授業を研究授業にした学生はこれまでで一番多く、小学校の先生から、「大変忙しかったが有意義であった。」とのお言葉をいただきました。